

日本原燃 原子燃料サイクル施設視察

7月31日(火)に、小林喜光代表幹事をはじめ副代表幹事や委員長、東北・北海道ブロックの代表幹事、事務局長など23人で、青森県六ヶ所村にある日本原燃原子燃料サイクル施設を視察した。

今回の視察は、東北・北海道ブロック各地経済同友会代表幹事との意見交換会の翌日に行われた。最初に、原子燃料サイクル施設を紹介する六ヶ所原燃PRセンターを訪れ、スタッフの方から大きな模型や映像、パネルを用いて原子燃料サイクルの仕組みをご紹介いただいた。

次に、原子力発電所の運転によって生じた低レベル放射性廃棄物を処理する「低レベル放射性廃棄物埋設センター」を見学した。施設の規模は現在、約8万㎡(200リットルドラム缶約40万本相当)であり、約30万本を受け入れている。これを最終的には60万㎡(200リットルドラム缶約300万本相当)に拡大する、とのことであった。

厳重なセキュリティゲートを通り、専用バスで「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」を訪れた。ここでは、原子力発電によって発生した使用済燃料の再処理をイギリスやフランスに委託し、その廃棄物がガラス固化体として返還されたものを、最終的な処分に向けて搬出されるまで、30～50年間、冷却して中間貯蔵している。中間貯蔵が終了後、地下300メートルより深い

安定した地層に処分されるが、これは、世界各国で検討されてきた宇宙処分などの方法と比較しても、最も問題が少ない、と認識されている。すでに、アメリカ、フィンランド、スウェーデン、フランスなどでは、地層処分の方針がとられている。日本ではまだ、最終処分の場所は未定であり、今後、各自自治体との交渉に委ねられる。

最後に「再処理工場」を見学した。中央制御室では、再処理事業所の敷地内に分散して設置されている各施設の運転に対し、5班に分かれて3交替勤務で監視をしている。1班は約80人であり、各班には再処理工場の運転を管理する統括当直長が配置されている。また、「使用済燃料受入貯蔵施設」では、受入容量3,000トンに対し、現在の貯蔵量は2,968トンとなっている。この施設は1999年に事業が開始され、2006年～2008年にかけてアクティブ試験により、425トン再処理が実施された。現在、試運転中であり、2021年の竣工を予定している。

この他、天然ウランを原子力発電用の燃料にするための「ウラン濃縮工場」や、再利用できるウランとプルトニウ



原子燃料サイクルの説明



六ヶ所原燃PRセンター 正面入口

ムを混ぜ合わせて作ったMOX燃料を製造する「MOX燃料工場」が原子燃料サイクルの一翼を担っている。MOX燃料工場は、現在、建設中であり、2022年の竣工を目指している。これが、再処理工場とともに完成すれば、ウラン濃縮から再処理、MOX燃料加工、廃棄物管理までのサイクルが完結し、準国産エネルギーの安定供給に大きく近づくことになる、との説明を受けた。施設の見学を通じ、放射性廃棄物処理の現状や、核燃料サイクルの進捗状況を把握することができ、参加者にとって有意義な視察となった。

No.811
August, September 2018
経済同友会 8-9

C O N T E N T S

特集

2018年度(第33回)
経済同友会 夏季セミナー
Japan 2.0:
最適化社会の設計

03

Close-up 提言

成長フロンティア開拓委員会【報告書】
橋本 孝之 委員長

イノベーションの震源地が
生み出す変化と破壊に
日本はどう対応すべきか

22

人材戦略と生産性革新委員会【提言】
櫻田 謙悟 委員長

社会課題の解決に向けて
イノベーションを創出し
再び輝く日本を実現する

24

デジタル政府・行革PT【提言】
玉塚 元一 委員長

マイナンバー法を改正し
デジタル化の基盤として
今こそ抜本改革を

26

Column

私の一文字 小林 いずみ

「風があれば、人生も経営も前に進める」

02

リレートーク 大海 太郎

「ジャパンパッシング?」

21

私の思い出写真館 稲野 和利

「富山の思い出」

31

新入会員紹介

28

日本原燃 原子燃料サイクル施設視察

30

お詫びと訂正

経済同友会No.810(平成30年7月25日発行)の記事に誤りがありました。

13ページ右下、「旅行・見学会」の見学先についての写真キャプションを「マンスワイン小諸ワイナリー」にお詫びして訂正致します。